

東洋医学と西洋医学

葛 山 輝 清

第二次世界大戦後、医学——東洋医学と対比すると西洋医学であるが——その西洋医学は目醒ましい進歩を遂げた。ペニシリンの発見によって、恐れられていた肺炎で命を失うことは無くなったし、ストレプトマイシンの発見は結核の死亡率を著しく低下させたことは周知の通りである。また、診断用機器も次ぎから次ぎへと発明改良されて今日に至っている。感染症に対する薬剤もペニシリン・ストレプトマイシンに留まらず、続々と新薬が発見され、また、予防接種のワクチンも新しく開発され、或いは改良されて感染症も恐れる必要が無くなった。世界一の長寿国となったのも、医療の進歩に負う所が極めて大きいと考えられる。

こうした西洋医学の進歩の中にあつて、東洋医学のブームが起つて来たのである。昭和五十一年に健康保険にも漢方製剤が使用出来るようになってから、更にブームは大きくなった。漢方薬を服用する人ばかりでなく、ハリや灸による治療を受ける人の数も増えた。これはどういう理由からであろうか。

一番に考えられるのが西洋医学の限界である。難病と称される多くの病気は、西洋医学が今日程進歩しても尚依然として難病なのである。更には続々と新薬が発見されて来たが、その新しい薬のために、また別の病気が起るといふ所謂医原病が現れて来たのである。また、新しい薬の思わぬ副作用というのも出て来ている。これらのことがからもう一度古い東洋医学を見直そうという動

きが出て来たのであると考えられる。

例えば、漢方薬は主に草木が原料である。中には「とりかぶとの根」のような猛毒を持った危険なものもあるが、「修治」と称して塩を用いたり、熱を加えたりして毒性を著しく減じて用いるようにして居り、一般の使用では何の心配も不要なのである。とりかぶとの根ですらこうして用いる故、他の漢方薬原料は人間の体に極めて安全なものである。この副作用が極めて少ないという点でも漢方薬のブームを見たと考えられる。

西洋医学で病気を治療する場合、最も大切なことは「病名」を決定する診断である。正しい「病名」無くしては正しい治療は無いのである。病名決定が非常に重要視されているのである。

更に西洋医学で大切なことは普遍妥当性である。即ち、例えば胃潰瘍のくすりであれば、どんなタイプの人の胃潰瘍に用いても同じくすりを用いた場合、同じように効果が無ければならない。勿論、例外はあるにしても、八〇%くらいの効果率が無いと西洋医学ではくすりとは言えないのである。

更には理論性である。何故潰瘍に効くのかということが明かにされなければならない。或る胃潰瘍のくすりは、胃の粘膜を攻撃する因子を和らげる作用を持つたために胃潰瘍に効果がある。即ち胃潰瘍患者の胃にはその粘膜を攻撃する因子が出現するが、これを中和して、胃粘膜を修復保護する作用が効果理由である。また、ある胃潰瘍のくすりは、胃粘膜の防御因子を強くして胃粘膜への攻撃から胃粘膜を守り、潰瘍を修復させるという効果理由である。これらの理論はいつでも、世界中の何処でも通用する理論であつて、そのことが西洋医学の基盤となっている。

一方、東洋医学の方には「病名」をつける診断学というもの

無い。それに代るものとして「証」という概念があるが、これは西洋医学的に言えば症候のようなものであって、例えば肋骨弓下に痛み、あるいは張る感じがあれば、これを「胸脇苦満」という。こうした証がぐすり即ち漢方薬を用いる時の根拠になるのである。例えば、胸脇苦満があれば、サイコという生薬の入ったサイコ剤の適応になるといった具合である。

従って、西洋医学的に「胃潰瘍」という診断がついた患者であっても、これを東洋医学的に見ると同じ証を示さず、夫々異った証を示せば、当然ぐすり即ち漢方薬も異ったものを与えるということになるのである。即ち普遍性がなくて個別的である。そしてまた、草木の茎根や実の煎じ薬であるから科学的な裏づけが出来ない。或程度科学的に解明されても、その「煎じ薬」が胃潰瘍のぐすりではなく、他の病気にも用い、また、いろいろな人の胃潰瘍をいろいろな漢方薬で治療するのであるから科学的に説明することが困難なのである。

以上西洋医学と東洋医学との違いについてその一端を述べたが、西洋医学は「病気を見て病人を見ない」即ち胃潰瘍ならば胃潰瘍だけを見て患者全体を見ていないということである。これに対して東洋医学では、患者を診て証を定め、この証によって処方を選めるのであるから「患者を見る」ということになる。

扱、この西洋医学の進んだ時代に、何が故に二千年昔の医学である漢方医学がブームとなったかについてであるが、昭和五十六年三月に日本東洋医学会が会員の医師にとったアンケートがある。漢方治療開始の動機についての質問では、現代医学の治療に失望したからというのが一三・一%、新しい治療方法を求めてというのが四七・一%、患者の希望が強いのでというのが一・六%、医

師自身或いは家族の病気に漢方薬の効果があつたからというのが一一・一%、医師会の会合或いは同僚から聞いてというのが一・八%、漢方講演会或いは勉強会に出席したのでというのが一四・三%、その他八・〇%となっている。

更に漢方薬を使う目的という質問に対しては、現代医学の欠点を補うためというのが二二%、副作用が無いからというのが一三・二%、疾病によつては現代医学の薬より漢方薬の方が効くからというのが三四・一%、治療の過程が自然で、無理が無いからというのが一六・七%、その他が三・八%となっている。

慢性疾患に漢方薬を使う場合であるが、漢方薬単独治療をするというのが三〇・二%、現代医学の薬を必ず併用するというのが一四・一%、時に現代医学の薬を併用するというのが五五・七%となっている。

これらのアンケートの結果を見ると、漢方薬使用の目的は単に副作用が少ないからという様な消極的な理由でなく、漢方療法はすぐれているといった積極的な理由で漢方薬が使用されていることが判るのである。

一例をあげよう。昭和三十九年生れの男性で、主訴は次ぎから次ぎえと腎部が化膿してその度に注射や内服薬の投与をうけたが、その時は治つても、また新しいおでぎが出来てくるということで、昭和六十一年三月十七日に漢方治療を求め来院して居る。身長一米八〇㎝、体重は一〇八㎏という大男であるが、腎部にはおでぎの治った紫色のアトが幾つも認められた。血液を採って検査しても異常所見は無く、かなりかた太りの感がある。そこで「防風通聖散」というかたぶとりの体毒を取り去る漢方薬を投与した。漢方薬は化膿菌に対し何の力も無いが、この防風通聖散を

服用し始めてから腎部のおできが全く出来なくなったのである。丁度治まりかけの時期に漢方薬をたまたま服用し始めたからではないかという疑問も起るが、服薬後一年ほどして服薬を中止したところ、再びおできが出来はじめて、あわてて続いて服用して化膿せずに済んだということもあり、明かに漢方薬の効果である。この例は西洋医学ではどうにもならなかったおできを漢方薬で治した例であって、化膿菌に対する考え方も、化膿菌そのものに対処するという西洋医学に対し、化膿菌に侵される側の体の状態ということを見つめるのであって、病氣を見ずに病人を見つめるということになるのである。

荻生徂徠は「太平薬」の中で、「下手の医者の治療は、痰があれば痰の加減をし、熱があれば熱をさまし、不食なれば脾胃を補い、瀉あれば瀉を止め、咳あれば咳の加減をし、一色も残さじと加減配剤、理窟はきこえたるやうなれども、病はいえぬなり。暫くは効あるに似たれども、またあとより再発し、あるひは外の変化する出来て、病おもり、終に死に至るなり。上手の医者には、あきらかに病原を見て、様々な証あれば、病の根本、或ひは疝氣なりと見て、疝氣を治し、或ひは虚なりと見て補へば、諸証一々治するに及ばずして、おのづから癒ゆるなり」と述べ、随証施治といつても、一々の証にわづらはざれず、病人をよく見て治療するの必要を説いているのである。

東洋医学は「治りさへすれば良い」という考え方で来て居り、こうしたら病氣が良くなるとか、こうしたら治ったという事実と

経験が重要視されて来て居り、なぜこの方法、薬で病氣が良くなるのか、或いはどういう機転で治ったのかというような理論についての追求が、全く無かったのである。要するに治りさえすれば良いのであって、こういう点をも含めて東洋医学特に漢方医学の特徴をいくつかまとめてみると、(一)局所的な病的変化でも、それを体全体の調和が破れたために起ったものとして考え、全身の調和を整えることが最高の治療方針とされている。(二)あくまでも個人の病氣を治す実利主義的な臨床医学として発達して来た。(三)常に過去の経験を重んじる。(四)自覚症状を重視し、患者の主訴をもとに治療をすすめる。(五)体の性質を改善することによって病氣を予防する。(六)内科的治療にすぐれている。(七)薬は天然産の生薬を用いる。といった点があげられよう。

一方これに対し西洋医学の方には、(一)体の部分的な病変の研究にすぐれている。(二)社会医学が発達している。(三)理論が大変すぐれている。(四)科学的検査による他覚的所見が尊重され、病名を重視する。(五)外科的処置に長じている。(六)人工的な薬品を使う。などの特色があり、漢方医学と比べた場合、夫々の長短があつて、両者の優劣は一概には定められないのが現状である。

現在は西洋医学が非常に発達して居るが、西洋医学とその基盤を異にする東洋医学殊に漢方医学の価値もまた見捨てることは出来ない。双方の特色を生かして治療に当れば更に大きな効果を上げることが出来ると思われる。